

「編みゆにけーしょん」

マトメ：工房長 志村

参加人数：7名

「編む」という文化、その根っこには、「結び」の原理がある。糸と糸を寄り、輪を作って結ぶという発明は、ある者とする者が出会い、互いに和を持ち、なにかしらの姿を留めるという根本原理の文化的形面であると言える。

二〇一二年四月二十二日、秋葉原にある枯れた喫茶「庵」に数人が集い、この「結び」の原理と対峙した。

ただ結ぶ あるがままに

何を作るか決めて手を動かす。マフラーを作ろうと決めて、ニット編みを始める。動機と行為という因果的な観点ではそれで足りないが、どこか息苦しい。「マフラー」をゴールに据えるならば、編み物は手段となり、ノルマとなる。人生に例えるならば、終わりとして死ぬことがゴールであり、そのためのノルマとして生きる。他の文脈はないのだろうか。今回のイベントでは、ただあるがままに結び続け、自然と面の広がりを持ち繋がるという編み物を行った。この文脈に先ほどの人生観を当てはめなせば、「ただあるがままに生きていて、気づいたら死んでいた。」となる。



「何か」を編もうとしなくてもいいのではないか。ただ結んでいたら、編みものになるという結果に納得してもよいのでは。ただし、出来上がるモノの用途や仕上がりに頓着しなくていいというわけではない。良い職人がしつらえたジャケットをよく見れば分かるように、結び目の一つ一つを丁寧に、気持ちよこめ、また着る人への思いを高めてしつらえていけば、必ず良いモノが出来上がる。高い目標を掲げるのではなく、気持ちよめて目の前の結び目をこつこつ作る。そういうものづくりは、もう用を成さないのだろうか。



一人ひとり、ある大きさに広がったら、人に着せて結び合わせていく。そうしなければならないわけではない。結び続けていると、自然とそうしたくなる



● さ ● ろ ● ん ● エ ● 房